

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人  
**小羊学園**  
〒433-8105  
静岡県浜松市北区三方原町 2709-12  
電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707  
E-mail kohitsuji@imix.or.jp  
H.P http://www.kohitsuji.or.jp/  
発行人：稲松 義人  
印刷所：SRS株式会社  
定 価：一部30円  
2012年5月20日  
第 349号

4月28日(土)小羊学園第46回創立感謝祭が行われました。創立感謝祭当日は、①記念礼拝(午前)②講演会・シンポジウム(午後)③懇親会(夕方)の3部構成で行われ、各式典、イベントに来賓・お客様・利用者・ご家族・職員が参加をしました。午前中は11時から記念礼拝を執り行い、保護者・お客様・ボランティアなど、利用者・職員以外に100人近い方が参加しました。礼拝では森田恭一郎遠州栄光教会牧師の司式のもと、「天の父の羊」と題した説教を頂き、御言葉に触れ、礼拝献金は東日本大震災の被災地に奉げられました。その後、昼食を挟んで交流を深めることができました。

午後には会場を聖隷クリストファー大学に移して記念講演&シンポジウムを行いました。会場には、旧職員や関係者など100名を超える出席がありました。初代山浦俊治理事長の学友であり以前に聖隷福祉事業団の理事長を務められた長谷川力氏に「山浦俊治はなぜ小羊学園をはじめたか」と題し、若き日の山浦理事長との交わり、そして小羊学園のあゆみを紐解いていただきました。その後、「小羊学園における障がい児福祉の歩み」と題したシンポジウムを行い、元施設長の戸田武氏、渡辺禎子氏、現施設長の山崎陽司氏が

登壇し、開設直後や養護学校通学時、児童施設としての存続決断など、小羊学園の節目におけるエピソードや、当時の山浦夫妻との思い出のエピソードなどを振り返りました。夕方は会場を三方原スクエアに戻し、懇親会を行いました。旧職員や関係者と現職員が40名近く集まり、昔話に花を咲かせたり、小羊学園のこれからの夢を語りあったり楽しい時間を過ごしました。

4月28日に小羊学園の創立感謝祭が催された。最初の施設「小羊学園」が開園してから46年。今の施設では三方原スクエア児童部がその流れを受け継いでいる。創立感謝祭も、三方原スクエアに名称が変わったあとも三方原スクエアで続けられてきた。昨年、法人の会議で「今は施設としての名称は三方原スクエアになったのだから、小羊学園創立感謝祭というのなら法人全体の催し物であるべきではないか」という意見がでた。それで、今年はい例年どおり三方原スクエアで記念礼拝とお祝いのお食事をしたあとに、社会福祉法人小羊学園として、聖隷クリストファー大学の教室をお借りし、創立記念講演会を計画することになった。

長谷川さんの講演のあと、「小羊学園における障がい児福祉の歩み」と題したシンポジウムをした。障がいの重い子どもたちが学校に受け入れてもらえなかった時代から、子どもたちの成長を支援し、小羊学園で働く働かれた戸田武さん、渡辺禎子さんに、現在の三方原スクエアの施設長の山崎さんと私とが加わり、小羊学園の歩みを振り返った。その時代時代の職員たちが、施設の中でも少人数で生活できることを志向し、あるいは通学することや日中活動のために通って行く生活をめざしてきたことを振り返った。フロアで参加した旧職員からも、山浦園長が、職員の発想することを受けとめて様々なことにチャレンジさせてくれたことが話された。シンポジウムの最後に戸田さんが、小羊学園がこれからも大切にしていきたいこととして「居心地のよさ」だと話してくださいました。

現代社会は、色々な面で便利になり、ある意味生きるための苦労は少なくなってきたかも知れない。にもかかわらず様々な人たちが自分の居場所を見失っているような気がする。小羊学園の周囲で作りだされる社会(出会いとつながり)に居心地のよさを感じられるかどうかは、これからの小羊学園のあり方を思うとき、大切なキーワードの一つになるような気がする。

「居心地のよさ」  
理事長 稲松 義人

とくだった。長谷川さんの話から、山浦先生が戦中戦後に体験された衝撃的な体験について思いを巡らした。山浦先生が「小羊学園は平和運動なのです」と言われたということは聞いていたが、講演をお聞きし「平和運動」という言葉の意味がより深く感じられた。

なところだろうか。ありのままの自分が受容されている場であり、自分の思いが受けとめられる場であり、共に生きる仲間が感じられる場ではないだろうか。そしてそれが本来の人間らしく生きる姿なのではないだろうかと思っただ。そしてありのままの自分を生きたこと、このヒントをくれたのが、小羊学園で出会った子どもたち(障がいのある人たち)のような気がした。

創立をみんなで祝いました

4月28日(土)小羊学園第46回創立感謝祭が行われました。創立感謝祭当日は、①記念礼拝(午前)②講演会・シンポジウム(午後)③懇親会(夕方)の3部構成で行われ、各式典、イベントに来賓・お客様・利用者・ご家族・職員が参加をしました。午前中は11時から記念礼拝を執り行い、保護者・お客様・ボランティアなど、利用者・職員以外に100人近い方が参加しました。礼拝では森田恭一郎遠州栄光教会牧師の司式のもと、「天の父の羊」と題した説教を頂き、御言葉に触れ、礼拝献金は東日本大震災の被災地に奉げられました。その後、昼食を挟んで交流を深めることができました。



社会福祉法人小羊学園 平成23年度 苦情受付のご報告

法人では各事業所に苦情受付担当者、解決責任者を設置し、サービス利用や施設運営に関わる苦情や要望・相談を受け、必要な措置を講じてきました。平成23年度に皆さまから頂きました苦情・要望件数をご報告します。

施設等に関する苦情	3件	利用者支援等に関する苦情	4件
施設等に関する要望	2件	利用者支援等に関する要望	2件

○皆さまから頂きました苦情・要望について、真摯に対応させて頂きました。が、至らぬ点もあったかと思ひます。改めてサービス改善に努めていきます。



小羊学園を支える会

2012年度寄付金報告  
4月受付分 506,600円(46件)  
累 計 506,600円(46件)

小羊学園への寄付金振込み先  
郵便振替口座 00800-8-107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園  
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園  
ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。  
下記へご連絡ください。  
小羊学園を支える会事務局(鈴木)  
三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

編集後記

先日行われた小羊学園の創立感謝祭の講演・シンポジウムでは、創立者である山浦俊治と小羊学園の歩みについて学ぶことができました。役員会や支援担当者会議では、4年後の50周年を迎えるにあたって、法人の歩みを資料として残す作業を進めていこうと議論しています。

時代が変わり福祉の制度や取り巻く社会が変わっても、山浦先生が残した言葉や活字、そして信仰者としての生き様を継承していくことを切に感じました。初夏の爽やかな風から梅雨に向かっています。節電や計画停電の危機もあり夏に向けて不安も抱える中です。皆さまどうぞお身体ご自愛下さい。(F)

# 復興への想いを忘れない！

小羊学園では今年度、福島県南相馬市の「NPO法人さぼーとセンターびあ」へ職員派遣をしています。今回は、その経緯と第1回目のレポートを報告します。

## 南相馬との出会いから

支援センターわかき  
支援部長 古橋 誠

あの忘れられない未曾有の大震災から1年。地震・津波・放射能で平穏な日々を生活基盤を奪い去られた現地。そして未だに復興の道筋すら立っていない現実。同じ日本人として人間として心を一つにしていきたい。そう願わずにはいられません…

震災後から、私たちにできることは何かと問い、様々なルートで被災地支援を検討してきた。昨年5月のゴールデンウィークに、稲松理事長はじめ4名の職員がキリスト教社会事業同盟でつながりのある岩手県の奥中山学園が主催して、宮古教会で行われた復興支援イベントに出掛けた。その際に、津波で全壊した障害者支援施設を訪問し、お手伝いできることがあればと申し出たが支援の依頼には至らなかった。秋には私自身も南三陸町へガレキ撤



3.11 から何も手がついていない住宅

去のボランティアに参加し、現地の情報収集もした。その後も、知的障害者福祉に携わる法人として障害者支援の専門性を活かした支援ができればと思いつつ、現地とのパイプが繋がらないまま時間だけが過ぎていった。

8ヶ月が経過した11月下旬、浜松市の通所施設を主に運営する法人の交流パーティーにご招待いただいた際、シンポジウムで福島県の「NPO法人さぼーとセンターびあ デイサービスびあなっつ」の郡(コオリ)施設長のお話を伺った。

さぼーとセンターびあは、南相馬市で「びあなっつ(生活介護)」「ビーンズ(就労継続)」「えんどう豆(地域活動支援センター)」を運営し、南相馬や周辺地域における日中活動支援の中心的役割を担っている。福島第1原発から半径25kmに位置し震災直後から被爆の不安が常につきまとう場所。半径20kmの避難指示区域からは外れたものの、市民の多く特に子どもを持つ家庭は自主的に避難し、人口7万人の街は1万人までに減少した。現在は半径10kmまで制限が解除され、人口も4〜5万人にまで戻りつつある。

そんな中、「目の前に助けを求めている人たちがいる」と南相馬に留まった志に感銘を受け、何かしらのお手伝いができればと思い、講演後ご挨拶に伺い名刺交換させていただいた。

その後、二度南相馬市に伺い、青田法人理事長や郡施設長から直接、震災後の様子やさぼーとセンターびあの実践をお聞かせいただいた。その内容は平穏に暮らす私たちには、想像を絶する現実の連続で、報道では知りえない現地の実情を痛感させられた。

震災以降、復興支援の流れは震災直後の物的支援から必要なる人的支援へと変わり、最近では「自立へ」と変わりつつある。しかし、福島の場合は様相が違う。放射能への不安から避難を続ける人たちが特に若い働き手が市に戻



就労継続支援B型ビーンズの外観

てこない。さぼーとセンターびあも同様で、震災前から働いていた職員が離職され、新たな職員は経験が浅く雇用が安定しないそう。

それらのお話を聞かせていただき、小羊学園として1年間応援できないかと内部調整し、郡施設長に人的派遣の意向をお伝えした。自立へ向う気持ちと体制が整わない現実との狭間で気持ちの揺れもあったようだが、私どもの思いを受け止めてくださり、職員派遣の準備に取り掛かった。

準備の関係で年度当初からの支援はできなかったが、派遣の調整を行い、このゴールデンウィーク中に現地に入り引越し作業を行った。生活拠点として、さぼーとセンターびあ理事の遠藤さんの旧宅をお借りすることができ、5月7日から「ビーンズ」で支援と学びの場を与えていただく運びとなった。

少しでも多くの人たちに現状を伝えていかなければならないという使命感と知らないという危機感を持った。

私は5月からNPO法人「さぼーとセンターびあ」が運営する就労継続B型事業所「ビーンズ」で働かせていただいている。20名の研修生(利用者)に対して、所長、職員3名、1週間ごとに代わるJDF(日本障害フォーラム)スタッフ1名、そして私の計5名という体制で支援を行っている。利用されている方は、重度の方から軽度の方までさまざまである。みなさんの仕事の内容は、缶バッジ製作、砂の小分け(ぬいぐるみの中に入っている砂の重りの分量分け)、公共施設の清掃、さをり織り、図書館にて喫茶も行っている。缶バッジが好評で受注が多いこ

## 東日本大震災の復興支援にあたって

共同生活介護ひまわり  
主任 渥美 雅世

震災直後より個人的にボランティアが出来ないかと情報を収集していたのだが、中々チャンスがなく心苦しい日々を過ごしていたところ、東日本大震災支援プロジェクトの話を聞き、是非にと懇願し参加させて頂くこととなった。派遣にあたり、福島県および南相馬市の現状の様子の情報提示、さぼーとセンターびあを含む福祉の現場での震災後の課題の把握、それらを踏まえたうえで浜松市、小羊学園における今後の起きうる地震対策の提案をしていくよう取り組んでいきたいと思った。

まず南相馬市に到着し感じたことは、復興とは程遠い現状であるということだった。放射能による警戒区域だった区はまだ倒壊した家屋も手つかずのままであり、やっと人が入ることが許され、5月中旬になりボランティア等により、ガレキ撤去され始めている。震災より1年以上経過していてもこの状態であることは、この地に来なければ解らないことであり、復興の遅さは想像以上であることが解る。仮設住宅は南相馬市だけでも2000世帯以上、戻れる見込みもない方が多数いらっしゃるという現実を目の当たりにしたとき、



缶バッジ作業の様子

と、砂の小分けの仕事が増えたことで、できる仕事が多くなり仕事量も比較的に充実していると思われる。研修生のみならず、あちこちから「終わったよ。次は？」と声が飛んでくる。その声を聞くと、こちらですぐに次の仕事を提供し駆けずり回っている状態である。やはり人手不足は否めないが、職員の方々は研修生みなさんの意欲を絶やさないために奮闘している。

研修生全員の方が被災者であり、避難生活を経て、帰宅してきても屋外は控えた方が良くという制限もあり、また、いまだに仮設住宅での生活を強いられる方も多し。そんな生活の中だからこそ、より仕事のできる喜び、通うことのできる喜びもひとしおで、「楽しい」という声が多く聞かれるのだと思う。生活にメリハリがつけられたこと、仲間たちがいることにより精神的安定にもつながったと思われる。それは研修生だけでなく、保護者の方々にもいえることだと思つた。その状況を踏まえると通所施設の重要性を強く感じた。いかに迅速に再開できるか、今からシミュレーションしたり、話し合ったりしておくことも避難訓練同様大切なことだと感じた。それは組織としてももちろんだが、個々で考えることが最も大切で、職員、保護者の方々にもそのような話ができる機会を設けていければよいと感じた。



ビーンズのみなさんと 左端が筆者

最後に、この活動を全国から1週間単位で来られるJDFスタッフからは素晴らしい支援ですとあって頂いている。3ヶ月の間、派遣させていただけただけは法人内のみなさんの協力なくして実現しなかったこと、そして、さぼーとセンターびあのみなさんが気にかけて頂き、とてもよくして頂いていること、このような貴重な経験をさせて頂けること、すべてに感謝の気持ちでいっぱいである。残りの派遣期間を南相馬市のため、さぼーとセンターびあのため少しでも役立てるよう、そして、帰ってきた際には、地域、法人へ還元できるよう頑張っていきたいと感じている。福島県 南相馬市より(現地レポートを小羊学園ホームページにて報告します。ぜひ覗いてみてください)